2023 東アジア国際シンポジウム

――4 年ぶりの開催、120 余人が参加――

東アジア総合研究所は 5 月 17 日、コロナ禍による延期を余儀なくされたあと、4 年ぶりに東京神保町の学士会館で「東アジア国際シンポジウム」を開いた。「5000 年の悠久な歴史の中から、和解・友好の鍵を探す」を副題とし「日韓関係改善に向けての新しいアプローチ」を主題に掲げた。最悪の関係とされていた日韓が、3 月に尹錫悦韓国大統領が訪日し岸田首相と日韓首脳会談を行ったことでシャトル外交復活の端緒が開かれて間もなかったためか関心は高く、会場に準備した 100 席を越えて 120 余人が集まり活発な議論を繰り広げた。韓国のハンガラム歴史文化研究所・正しい歴史学術研究院と共同主催した。

駐日韓国大使館、日本外務省、日韓親善協会中央会、在日本大韓民国民団中央本部の後援を受け、日韓文化交流基金からの助成や、多数の企業協賛を得て実現した。

30 年の節目迎えた東アジア総研

日本側主催、東アジア総合研究所の高奈利理事が司会者となり午後 1 時に開会を宣言。姜英之理事長が「創立 30 年の歩み」配布資料を基に、1991 年 6 月の発足以来「北朝鮮問題セミナー」や「東アジア国際シンポジウム」など時局に応じた集会や定期発信「東アジアレビュー」を通じて活動してきた軌跡を振り返った。今回シンポジウムで「新アプローチ」を掲げたのは「近現代の不幸な歴史にいつまでも足を引っ張られていて良いのか」と

いう未来志向の問題提起だと語った。また日韓関係は経済、文化分野だけでなく、北朝鮮のミサイル発射など東アジア周辺状況の変化に伴って安全保障分野にも対象が広がってきており、これは時代の要請だろうと指摘した。さらに、日本も韓国も一国だけでは発展の限界にきており、北朝鮮の改革・開放をもたらせるような「ジャパン・コリア共同体」をともに作っていき、それが「東アジア共同体」の礎(いしずえ)になっていくのが望ましいと国際経済学者として思うようになった、今後も努力していくと語った。

続いて韓国側主催者、韓国ハンガラム歴史文化研究所の李徳一(イ・ドギル)所長があいさつし、「五千年という悠久の歴史がある韓国、日本が、今後の和解・友好の道を探る意義については、古代史の専門家として基調報告で詳しく述べたい。両国の心が離れてしまった原点は、古代に百済が新羅との戦いの中で働き掛けた結果、日本が関与することになったところにあるのではないかと思っている。今回シンポジウムが新たな友好へとつながるよう期待する」と述べた。

後援者でもある来賓が挨拶に立った。駐日韓国大使の代理として金玉彩(キム・オクチェ)駐横浜総領事が、姜英之理事長の日本での全方位活動を紹介しながら専門家の知識を討議の中で役立てるようにしていきたいと挨拶した。日本外務省の實生（みばえ）泰介アジア太平洋局審議官は、「3 月の日本での日韓首脳会談以降、外務省同士、あるいは経済界の間で対話が進み、両国関係の重要性が確認された。古代の関係を今回、討議する中で、さらに友好が深まるよう期待する」と述べた。日韓親善協会の河村健夫・中央会会長は韓国語で自己紹介した後、「朝鮮通信使交流議員の会」の会長として 5 月にも釜山に行ったが、日韓の共同行事を成功させてきた思い出があると語り、「長い友好関係の中で不幸な歴史はたかだが 50 年に過ぎないが、決して過去を忘れることなく未来指向で進めたい」と内閣官房長官や拉致問題担当相などを経験した自民党のベテラン議員らしい挨拶をした。「トップのリーダーシップが大事で、尹大統領の並々ならぬ決意に本格的な関係改善の兆しを見た。この機を逃してはならない」と述べた。

次いで日親善協会中央会の尹星駿(ユン・ソンジュン)顧問が「韓日は互いに運命共同体だと認める必要がある。2025 年の大阪万博の後を引き継いで 2030 年の釜山エキスポ成功へつなげたい」と述べ、IT などの分野で協力して世界標準を目指す、大学の学位認定の拡大などを課題として挙げた。在日本大韓民国民団中央本部の呂健二(ノ・ゴンイ)団長も挨拶した。「日韓関係の悪化は、在日韓国人の生活にもよくない。民団は、日韓関係改善の架け橋の役割を果たしていきたい」と意欲を述べた。

基調講演と討論

この後、東アジア総合研究所理事で法政大学講師の魏聖銓(ウェー・ソンジュン)氏がコーディネーターとなり、本格的な意見交換が始まった。

今を写す鏡の垢を削り落とそう

李徳一所長が「韓日古代史から見た両国の歴史的和解」と題して基調報告を行った。(日韓）政府間の関係が良くなっても民間レベルの内部まで変化させることはできない、だから今回シンポジウムのような民間での意見交換の場が大切だと指摘。

多分、日韓関係ほど複雑な状況で推移してきたのは世界中を探しても珍しいだろう。歴史的関係だけでなく、心理的関係も絡んでいるためだ。心の距離がかけ離れた状態になっているのは、日本の過去の帝国主義と植民地支配の心理が反映しているためだ。現代の日本は民主主義国家だが、帝国主義時代と大きく変わらないと韓国の人々が考えていることが、核心的要因だと言える。日本だけでなく韓国でも、過去の歴史学会の誤りと断絶できていない。特に古代史学会では帝国主義時代の名残を引きずっている。原因、根を見つけ出して対応策を講じるべきだろう。

日本側文献では、西暦６６３年に白村江の戦いがあり、新羅と唐の連合軍が、百済復興・倭支援の連合軍を打ち破った。百済復興軍の都だった周柔城は新羅・唐連合軍側の手に落ち、日本から来た将兵が祖先の墳墓の地である百済にもう行けなくなったことを嘆いたとされている。現在、対馬（金田城）や九州北部、瀬戸内海など日本の各地に朝鮮式の山城が残っている。白村江で百済が滅亡したあとヤマトに渡ってきた百済の人々が地元民の協力を得て築いた城だ。新羅・唐の連合軍が日本列島まで攻めてくると恐れたのだ。新羅・唐の連合軍は結局分裂し、676 年に唐軍を退けた新羅が三国統一を成し遂げた。重要なのは、百済を先祖の墓のある場所と考えていた人々(古代倭人)がいたことだ。だが現在はすっかりかけ離れた見方が定着している。なぜそうなったのか。津田左右吉など日本の歴史学者と、その韓国人弟子たちの帝国主義的な歴史歪曲が大きい。古代の倭が瀬戸内海を渡って朝鮮半島南部へと進出した、だから近世の日本帝国による朝鮮の植民地化は侵略ではなく先祖返りしただけだという見方だ。戦後もまだ残っているこの見方を一掃すべきだ。

西暦 3 世紀ごろの中国の記録とされる「三国史」では、倭を「東夷国家群」の中のひとつとして扱っている。倭を日本ではなく渤海近くに住んでいた人々と中国ではとらえていたわけだ。現在の韓国人の祖先が中国大陸から来たように、現在の日本人の祖先も中国大陸から来ていた。これより早く、司馬遷の「史記」には、倭人が長江(揚子江)沿岸に住んでいたと書かれている。長い時間をかけて中国のさまざまな地域、そして朝鮮半島を通って

日本に移動してきたのであろう。

韓日両国のルーツは１つだったという意識が、過去の不幸だった歴史を回復するのに役立つだろう。韓国から来たわれわれはシンポジウム後に岡山と奈良を訪れる予定だ。製鉄技術の伝来などを岡山で見ようと思う。奈良を訪れる韓国人の多くは親近感を感じる。帝国主義の歴史観ではなく、わたしたちの祖先の存在、痕跡を心で感じることが大切だ。日本人も韓国の扶余などで同じような想いを抱くことができよう。今回のシンポジウムがわれわれの心を開き、祖先の痕跡を素直に見つめていける機会となるよう望みたい。歴史の鏡に照らして現在のわれわれの位置を測っていくわけだが､鏡には垢がこびりついている。この垢を削り落としていきたい。

続いて、京都大学の小倉紀蔵教授が「歴史認識と非認知的和解」と題して基調報告を行った。

植民地支配の二重性と人間の尊厳に注目を

ここに集まっている「覚悟を持った」人々にもそうだっただろうが、この数年間の日韓関係は切羽詰まってきた感じだった。その中で私なりにいろいろ考えてきた。仲良くするのも重要だろうが､「対等な関係をどう作るか」が一番大切だと思う。慰安婦問題や徴用工問題で人権を取り上げるが、歴史的な記述に問題があると指摘される。われわれに過去を見る勇気が足りないからだろう。1910 年から 45 年までを私は「併合植民地時代」と呼ぶ（韓国では「日帝強占期」が一般的だがイデオロギー的過ぎるので採らない。不快感を持つ方もいるかもしれないが)。併合の形ではあったが植民地の性格は持っていたわけで、嫌韓派の人々が「併合で同じにしただけ、植民地ではない」と言うような単純な対等関係ではなかった。

人類の歴史の中でも日韓関係は、「併合＝横の関係」、「植民地＝縦の上下関係」、この両側面が複雑に、重層的に絡んでいた稀有な例だ。二重性のある中で生き、単純な「親日派」「抗日派」の区分の中で人々が生きていたわけではない。1937 年には「戦場で戦う日本軍を応援し中国と戦う」と言った韓国知識人もいた。1990 年代の「歴史認識」の対立先鋭化の中で、歴史認識の単純化、平板化が進み、人間（の尊厳）に対する見方が劣化してきた。歴史認識は暴力的だ。なぜなら、人権などの概念を使って過去に生きていた人々の尊厳を棄損しているからだ。なので、日本の鉱山で働かされた韓国からの労働者をかわいそうだという視点だけからと

らえる日本の左翼の人々にも、私は批判的だ。誇りを持ち尊厳を持って生きていた人々だったという面を切り捨てている。

女性の尊厳もそうだが、人権より人間の尊厳に着目していきたい。日韓が戦後、さまざまな考え方をぶつけ合う中で成長してきた流れを、われわれは肯定的に考える必要がある。日本と韓国は世界でまれに見る和解をしてきた。「和解」に対する考えを変えねばならない。条約や裁判所判決で関係を決定的に定められてしまって不可逆的に蒸し返してはならないとすれば、暴力になる。言い合うことを通じてわれわれは成長してきた、「非認知的和解」とでも言おうか。日韓は「話しやすいところとだけ話す」経験を重ねてきた。日本は北朝鮮との対話が宿題として残っている。日韓の間で意見のぶつけ合いを重ねてきたこと、プロセスとしての和解を高い水準で進めてきたことに、欧米の植民地統治の終了、奴隷制脱却後の動きと比較しても、自信を持つ必要がある。

韓日双方の基調報告を受けて、コメンテーターが登場。

韓国の仁荷(インファ)大の国際政治学者、南昌熙(ナム・チャンヒ)教授が、小倉紀蔵教授の指摘した「歴史記述の暴力性」「非認知的和解」についてコメントし、中世の高麗と中国の国境史について中国の膨張主義的な歴史観に対応できる韓日の共同研究と資料共有を呼び掛けた。

日本が戦争放棄の憲法を持つにもかかわらず高度成長と日本型民主主義を維持してきたのは「恐ろしい戦争の傷痕の上に咲いた一輪のバラ」のようなものだったが、1990 年代からの中国の浮上、北朝鮮による核など大量破壊兵器の配備現実化によって、日本で軍事的リアリストの影響力が高まり周辺国も警戒した。しかし安倍政権を引き継いだ岸田政権の下でも朝鮮に対する日本の植民地支配の不法性を認めたサンフランシスコ体制の尊重がうたわれ、日本社会に厭戦思想と戦争への省察という二つの考えが根強く存在し続けていることが判明した。だから「全てではなく平和と現状維持を目指す歴史記述も存在していると指摘したい」と南教授は述べた。

韓国バラエティー界に中国人出演者は見られないが日本人は活躍している、日本の若者に韓国の文化コンテンツ好きが多いなどを挙げ、プロセス重視の小倉教授の提案を評価した。

かつて中国大陸への進出、「満州建国」合理化を図った（帝国主義）日本は、高麗の北方国境が鴨緑江と豆満江の南側にあったと矮小化したが、近年の韓国側研究によって、もっと北の中国東北地方に国境があったことが判明している。事大中華思想に走った朝鮮王朝の支配層が誤解の基を作った。中国の膨張

主義が北朝鮮への軍港要求や非常時の「北朝鮮管理」に結び付きかねない危惧もあり、韓日の学者による共同研究を模索していくべきだ。

静岡県立大の小針進教授はパワーポイントで文字テキストを流しながらコメントを加えた。

岸田首相と尹錫悦大統領の首脳会談にこぎつけるまで 12 年かかったが、17 世紀の豊臣秀吉によるいわゆる朝鮮出兵（文禄・慶長の役）から朝鮮通信使の派遣までにも時間が懸かっている。

コメンテーターの最後に、作家の姜龍一氏が「日韓古代史の鍵を握る神、須佐之男命」という題で、専門家ではないが、と前置きして話した。日本の「記紀」と朝鮮半島の史書の中の神の名前や由来など類似点の多さを指摘、須佐之男命が朝鮮半島から渡来したのではないかと想像力をふくませた結果を披露した。また、出雲は新羅系、大和は百済系渡来人の作った国で、その両者が「代理戦争」をしたのではないかとも語った。

これらのコメントを受けて、小倉基調報告者は日本の大学生が「古代史にとどまらず歴史全体に不案内すぎる嫌いがある。現代だけしか知らない人が多い」と指摘。南昌熙コメンテーターは、日韓で安全保障や民族主義について一緒に研究していきたいと語り、日韓の民族主義者同士が話し合う機会も必要だろうと述べた。

李徳一基調報告者は「古代史で日韓には共通点が多い。津田左右吉は『日本の自生民族、

非渡来』を唱えて韓国南部を支配していくことにつながった。この日本の民族主義＝帝国主義に挑んだのが韓国の民族主義だった。いずれも東アジアのためにはなっていない」と補足コメントした。

特別報告と徴用工の論点整理

この後、韓国から参加した金京雄(キム・ギョンウン)韓半島統一研究所長が「韓半島の平和と統一、アジア連合結成を提案」という特別講演をした。金所長はかつて韓国政府の統一省スポークスマンを務めた人物だ。

ロシアのウクライナ侵攻を例に挙げ、現代の「超接続社会」では、南北朝鮮の葛藤が激しいほど、共存・共栄の道を探さなければならないと強調。欧州連合(EU)の共通通貨ユーロ紙幣のデザインに使われている「橋」と「大門」を挙げ、開放と協力の重要性を示すものだと述べた。

北東アジアの安定には日本、中国、韓国が解決を求める責任を分担しなければならないと指摘する米ブルキングス研究所の報告があるとして、3 国の首脳会談を拡大発展させるなどを通じてアジア連合(AU)結成を目指そうと訴えた。

さらに、日本で活動している弁護士で、在日韓国法曹人フォーラム代表を務めている殷勇基(ウン・ヨンギ)氏が「2007 年に日本側で最高裁判決があり、問題提起はできるが裁判に訴える権利はないなど複雑な様相になっているのが現実だ」などと、徴用工問題の法律面での推移を説明した。戦争での非人道的扱いを裁く範囲は広がってきたが植民地化についてはまだそこまで至っていないという。ナミビアでは旧植民地宗主国のドイツが大量虐殺に賠償というか解決金を支払った例がある。今後は尹政権の進める第三者弁済が焦点化する可能性がある。いわゆる“押しかけ払い”ができるのかという問題だ。

東アジア総合研究所の姜英之理事長が「共同行動計画の提言」を行い、シンポジウムで意見を継続して交換していくだけでなく、互いの文化・歴史史跡をめぐるよう

にしていきたいと述べ、「日韓歴史文化交流ネットワーク」(仮称)を設けていくことが拍手で採択された。

最後に小野田明広副理事長が長時間の熱心な話し合いへの参加に感謝し、提言に基づき来年は韓国の嶺南、全南地方の遺跡巡りを計画していきたいので、ぜひ参加をお願いしたいと要請。友好親善は民間レベルの信頼に拠る部分が大きいので、30 周年を迎え今後さらに発展を目指したいと研究所としての決意を表明した。

司会の高奈利理事が徐清香（ソ・チョンヒャン）さんなど同時通訳担当者に感謝して閉会を宣言した。

シンポジウムが終わった後、同会場の出口付近ホールで 30 周年祝賀会が飲食付きで開かれ、ソプラノ歌手の田月仙(チョン・ウォルソン)氏がオペラ「カルメン」から「ハバネラ」を熱唱し、小型尺八のような韓国の竹製フルート「タンソ(短簫)」の演奏も行われた。何種類かのマッコリが会場で提供され、ひとしきり歓談を楽しんだ。